
研究報告

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究19
P.70-75(2017)

卒業前看護技術教育プログラムに関する研究からみたプログラムの成果

Results of Education Programs from Research on Technical Education in Nursing Programs before Graduation

永野光子¹⁾
NAGANO Mitsuko

小元まき子¹⁾
OMOTO Makiko

青柳優子¹⁾
AOYAGI Yuko

古屋千晶¹⁾
FURUYA Chiaki

要旨

【目的】看護基礎教育課程が卒業前に行う看護技術教育プログラムの成果に関する研究に焦点をあて、教育プログラムによる成果を明らかにし、効果的な卒業前看護技術教育プログラム実施に向けた示唆を得る。

【方法】医学中央雑誌Web版Ver. 5を用い、キーワードを「卒業前教育」「看護技術」「卒業前トレーニング」「卒業前演習」に設定し検索できた文献のうち、卒業前看護技術教育プログラムの成果を解明した51件を分析対象とした。分析には内容分析の手法を用いた。

【結果】卒業前看護技術教育プログラムによる成果を表す28カテゴリが得られた。28カテゴリとは、[1. 手順や根拠など技術に対する理解の深化]、[2. 習得度の低い知識・技術の解明]、[3. 就職後の実践に役立つ経験]、[4. 習得度の高い知識・技術の解明]、[5. 技術に対する自信獲得]、などである。

【考察】より効果的な卒業前看護技術教育プログラムの実施に向けては、学生が技術を反復して実施できるように準備を整える、卒業時の学生の技術習得状況に応じた目的・方法・内容を検討しプログラムを立案する、臨床の看護師が指導者として参加できるように調整する、の3点が示唆された。

キーワード：卒業前看護技術教育プログラム、看護技術、教育プログラムによる成果

Key words : nursing technical education program before graduation, nursing techniques, educational program results

I. はじめに

高度化・複雑化する医療や臨地実習における看護技術経験の制限などの様々な要因により、新人看護師の看護実践能力と求められる実践能力の乖離¹⁾が指摘されている。これらは、新人看護師の就業意欲の低下や早期離職¹⁾とともに、受け入れる側の看護師の疲弊やストレス^{2) 3)}にもつながる。このような状況に対し、平成22年、新人看護師研修が努力義務化され⁴⁾、

各施設が行う入職後の教育プログラムの充実が図られるようになった。看護基礎教育課程も、学内演習や実習の方法を工夫したり、卒業前に知識・技術の再確認や技術の習得を目的とした卒業前看護技術教育プログラム（以下卒前プログラム）が実施されたりしている。卒前プログラムは、正規の授業として単位認定される授業は少なく、その多くは、各教育課程が提供するプログラムに学生が主体的に参加する形で行われている。先行研究では、各教育課程が提供する卒前プログラムの評価が数多く行われているが、卒前プログラムによる成果の全容を明らかにした研究は見当たらない

1) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University
(Oct. 28, 2016 原稿受付) (Jan. 25, 2017 原稿受領)

い。そこで、本研究は、看護基礎教育課程が卒業前に行う看護技術教育プログラムの成果に関する研究に焦点をあて、卒前プログラムによる成果の全容を明らかにする。本研究の結果は、看護基礎教育課程が提供する卒前プログラムを、より効果的なものとするための資料となる。

なお、卒前プログラムの成果とは、プログラムを実施したことにより得た結果であり、具体的には、学生の技術到達度の変化や学んだこと、自己評価や他者評価の結果、授業評価結果など、対象とした研究が結果に示した内容をさす。

II. 研究目的

看護基礎教育課程が卒業前に行う看護技術教育プログラムの成果に関する研究に焦点をあて、卒前プログラムによる成果を明らかにすることにより、効果的な卒前プログラム実施に向けた示唆を得る。

III. 方法

1. 対象

看護基礎教育課程が卒業前に行う看護技術に関する授業やトレーニングに関する研究論文を対象とした。医学中央雑誌Web版Ver.5を用い、1982年から2013年に発表された文献を対象とし、キーワードを「卒業前教育」「看護技術」「卒業前トレーニング」「卒業前演習」に設定し検索できた58文献のうち、卒前プログラムの成果を解明した研究51件⁵⁾を分析対象とした。

2. 分析方法

- 1) 文献を精読し、卒前プログラムを実施したことにより得られた結果を示す単語、句、文章を記録単位として抽出した。
- 2) 研究のための問い「この研究は、卒前プログラムによりどのような成果が得られたことを明らかにしている

のか」をかけながら、記録単位を意味内容の類似性に基づき分類・整理し、カテゴリを形成、内容を示すカテゴリ名を命名した。

- 3) 各カテゴリの出現頻度と全記録単位に占める割合を算出した。

IV. 結果

対象となった文献51件から、プログラムの成果を示す236記録単位を抽出した。236記録単位を意味内容の類似性に基づき分類・整理し、内容を示すカテゴリ名を命名した。その結果、卒業前看護技術プログラムの成果を表す28カテゴリが得られた(表1)。28カテゴリを以下に示す。([]はカテゴリを、「」は記録単位を、()は記録単位数と全記録単位に占める割合を、『』は具体例を示す。)

- [1. 手順や根拠など技術に対する理解の深化] (30記録単位：12.7%)

表1 卒業前看護技術教育プログラムの成果

カテゴリ		記録単位数(%)	
1	手順や根拠など技術に対する理解の深化	30	12.7%
2	習得度の低い知識・技術の解明	28	11.9%
3	就職後の実践に役立つ経験	22	9.3%
4	習得度の高い知識・技術の解明	16	6.8%
5	技術に対する自信獲得	15	6.4%
6	知識不足や未習得技術の自覚と課題の明確化	13	5.5%
7	知識・技術の習得度向上	12	5.1%
8	学生の習得能力と未習得能力の解明	12	5.1%
9	技術実施による安心感獲得と不安の軽減	10	4.2%
10	知識・技術の復習と再確認	9	3.8%
11	就職への心構え	9	3.8%
12	臨床現場で行われている技術のイメージ化	8	3.4%
13	演習方法の工夫とその評価	6	2.5%
14	自己評価・他者評価による技術習得状況の理解	5	2.1%
15	現場の看護師による情報提供と手技やポイントの理解	5	2.1%
16	自信につながりにくい技術の解明	5	2.1%
17	学習の必要性実感と学習への動機づけ	5	2.1%
18	指導する看護師の学習機会	4	1.7%
19	技術習得度と技術や就職に対する不安との相関関係の解明	3	1.3%
20	技術習得度と技術反復回数との相関関係の解明	3	1.3%
21	課題への積極的な取り組み	3	1.3%
22	スタッフとして働く自分を思い描く	2	0.8%
23	看護師として責任を自覚する必要性の理解	2	0.8%
24	就職後に直面する問題への対応方法の理解	2	0.8%
25	解決困難な課題に対する自身の行動傾向の理解	2	0.8%
26	トレーニング内容と臨床とのギャップ実感	2	0.8%
27	教員と指導者が看護技術について共有する機会	2	0.8%
28	基礎教育と臨床とのギャップを埋める機会	1	0.4%
合 計		236	100.0%

このカテゴリは、「急変時の救急処置が理解できた」「口腔ケアを行う時は誤嚥のリスクを考慮しながら行う必要性を理解した」「与薬の基本を確認し患者の状況に応じ判断することができた」などの記録単位から形成された。

[2. 習得度の低い知識・技術の解明] (28記録単位：11.9%)

このカテゴリは、「達成状況が低い」「習得度が低い」「到達度が低い」などの記録単位から形成された。習得度が低い知識・技術とは、『患者の状態に応じた寝衣交換』、『移乗の援助』、『点滴静脈内注射の準備、滴下調節、刺入部・滴下状態の観察』、『輸液ポンプ・シリンジポンプの操作』、『膀胱留置カテーテル挿入と管理』、『採血』である。

[3. 就職後の実践に役立つ経験] (22記録単位：9.3%)

このカテゴリは、「採血のトレーニングは実践の場で助けになった」「就職後、複数の患者の優先順位の決定に役立った」「実践の場で役立ったという得点が高かった」などの記録単位から形成された。

[4. 習得度の高い知識・技術の解明] (16記録単位：6.8%)

このカテゴリは、「達成状況が高い」「習得度が高い」「到達度が高い」などの記録単位から形成された。到達度が高い技術とは、『処置実施前の患者確認』、『滅菌手袋の装着』、『創傷処置』、『点滴静脈内注射の刺入部位の選定、刺入部の観察、点滴中止の判断』であった。

[5. 技術に対する自信獲得] (15記録単位：6.4%)

このカテゴリは、「静脈血採血、輸液準備などの技術への自信が高まった」「自信をもってできるの項目得点が高かった」「実践への自信がついた」などの記録単位から形成された。自信がついた技術とは、『静脈血採血』、『輸液準備』、『輸液ポンプ・シリンジポンプの取り扱い』、『ガーゼ交換』、『膀胱留置カテーテル』であった。

[6. 知識不足や未習得技術の自覚と課題の明確化] (13記録単位：5.5%)

このカテゴリは、「学生が自己の知識や技術の不足を自覚する」「技術習得に向けた自己の課題を見つけ出す」などの記録単位から形成された。

[7. 知識・技術の習得度向上] (12記録単位：5.1%)

このカテゴリは、「診療の補助技術の習得レベルが上がった」「技術が身についたが高得点だった」「演習前後の知識・技術の自己評価得点が有意に上昇した」

などの記録単位から形成された。

[8. 学生の習得能力と未習得能力の解明] (12記録単位：5.1%)

このカテゴリは、「学生が事例に則した看護技術を時間内に終わらせる能力がある」「対象を尊重する態度が養われている」「援助実施前の安全な環境調整が定着していない」などの記録単位から形成された。

[9. 技術実施による安心感獲得と不安の軽減] (10記録単位：4.2%)

このカテゴリは、「技術に対する不安が軽減した」「一度やったという安心感があり就職後の精神的安定につながった」などの記録単位から形成された。

[10. 知識・技術の復習と再確認] (9記録単位：3.8%)

このカテゴリは、「知識を復習し確認できた」「忘れていた技術を確認できた」「就職前に復習する機会となった」などのカテゴリから形成された。

[11. 就職への心構え] (9記録単位：3.8%)

このカテゴリは、「技術演習により就職の心構えができた」などの記録単位から形成された。

[12. 臨床現場で行われている技術のイメージ化] (8記録単位：3.4%)

このカテゴリは、「臨床で行われる看護技術のイメージができた」「複数患者への対応を具体的にイメージできた」などの記録単位から形成された。

[13. 演習方法の工夫とその評価] (6記録単位：2.5%)

このカテゴリは、「少人数の演習に満足感を得た」「デモンストレーションの実施の有無による達成度の相違はなかった」などの記録単位から形成された。教員が取り入れた演習方法の工夫とは、少人数のグループ編成、デモンストレーションの実施の有無、臨床現場を想定した事例や課題の設定、チェックリストの活用、学生間討議などであった。

[14. 自己評価・他者評価による技術習得状況の理解] (5記録単位：2.1%)

このカテゴリは、「技術習得状況を自己評価する機会になった」「他者評価を受け自分の技術に自信をもてた」などの記録単位から形成された。

[15. 現場の看護師による情報提供と手技やポイントの理解] (5記録単位：2.1%)

このカテゴリは、「臨床に近い手技やポイントを学べた」「知っておいてほしい知識やインシデントについて、現場の看護師から生の情報を得ることができた」

などの記録単位から形成された。

[16. 自信につながりにくい技術の解明] (5 記録単位: 2.1%)

このカテゴリは、「体験しても自信につながりにくい技術がある」という記録単位から形成された。体験しても自信につながりにくい技術とは、『経管栄養』『膀胱留置カテーテル挿入』『酸素ボンベの取り扱い』であった。

[17. 学習の必要性実感と学習への動機づけ] (5 記録単位: 2.1%)

このカテゴリは、「看護技術を学習する動機づけになった」「就職に向け学習の必要性を実感し意欲が向上した」などの記録単位から形成された。

[18. 指導する看護師の学習機会] (4 記録単位: 1.7%)

このカテゴリは、「指導者にとり日頃の看護を振り返る機会になる」「卒業前の学生の現状を知り、新人教育の充実につなげる」などの記録単位から形成された。

[19. 技術習得度と技術や就職に対する不安との相関関係の解明] (3 記録単位: 1.3%)

このカテゴリは、「就職に対する不安の軽減には技術の習得度が関係する」「トレーニング前後で状態不安と自己効力感の失敗尺度が減少した」などの記録単位から形成された。

[20. 技術習得度と技術反復回数との相関関係の解明] (3 記録単位: 1.3%)

このカテゴリは、「複数の技術を3回以上体験した学生の習得度が高い」「練習回数と技術習得度に弱い相関があった」などの記録単位から形成された。

[21. 課題への積極的な取り組み] (3 記録単位: 1.3%)

このカテゴリは、「課題に積極的に取り組む」「技術練習に主体的に取り組む」という記録単位から形成された。

[22. スタッフとして働く自分を思い描く] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「スタッフとして働く自分をイメージした」という記録単位から形成された。

[23. 看護師として責任を自覚する必要性の理解] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「看護師として責任を自覚する必要性を実感した」「現場の厳しさや責任を実感した」という記録単位から形成された。

[24. 就職後に直面する問題への対応方法の理解] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「就職後、わからないことは先輩に聞くなどして確実に実施できるようにする必要性を学んだ」「自己の能力を判断し適切な支援を受ける必要があることを認識した」という記録単位から形成された。

[25. 解決困難な課題に対する自身の行動傾向の理解] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「未経験の項目に加え既習の内容であっても状況の変化で実施できなくなることに気付く」「複数患者受け持ちや多重課題に置かれたときに自分がどのようになるかがわかった」という記録単位から形成された。

[26. トレーニング内容と臨床とのギャップ実感] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「トレーニング内容と臨床のギャップを実感した」という記録単位から形成された。

[27. 教員と指導者が看護技術について共有する機会] (2 記録単位: 0.8%)

このカテゴリは、「教員が臨床で行われている看護技術の実際を理解する」「看護技術と理論を結びつけ指導者と共有する」という記録単位から形成された。

[28. 基礎教育と臨床とのギャップを埋める機会] (1 記録単位: 0.4%)

このカテゴリは、「基礎教育と臨床のギャップを埋める機会になった」という記録単位から形成された。

V. 考察

本研究の結果、卒前プログラムの成果を表す28カテゴリが明らかになった。28カテゴリを文献と照合し考察し、卒前プログラム実施に向けた示唆を得た。

第1に着目したカテゴリは、[4. 習得度の高い知識・技術の解明]、[2. 習得度の低い知識・技術の解明]、[16. 自信につながりにくい技術の解明]、[8. 学生の習得能力と未習得能力の解明]である。この4カテゴリを形成した記録単位数は全体の25.9%を占め、最も多く、卒前プログラムの成果の中核となることを示す。これらのカテゴリは、卒前プログラムにより習得可能な知識・技術がある一方で、習得度が低かったり自信につながりにくかったりする技術があることを示している。新人看護師の看護実践上の課題を明らかにした研究⁶⁾は、新人看護師が実施困難と感じている技術が、点滴静脈内注射、筋肉・皮下注射、採

血、吸引など診療に伴う技術と、点滴実習中の患者の清潔援助、移動の援助などであることを明らかにした。これらは、看護基礎教育課程を卒業する前の学生と新人看護職員が困難を感じる技術は共通しており、その習得が容易ではないことを示す。習得が困難な技術については、卒前プログラムにおいて何をどこまで学ぶのか、目的を検討し、目的に合致した方法を決定する必要がある。また、新人看護職員研修においては、新人看護師が習得に困難を感じる技術や自信につながりにくい技術を中心に研修を計画することで、より効果的な研修を提供できる。卒業前の学生と新人看護師に共通する看護技術の困難さが何に起因するのかを解明することは、今後の課題である。

また、卒前プログラムにより、[10. 知識・技術の復習と再確認]、[1. 手順や根拠など技術に対する理解の深化]、[7. 知識・技術の習得度向上]、[15. 現場の看護師による情報提供と手技やポイントの理解]、[20. 技術習得度と技術反復回数との相関関係の解明]という成果が得られていた。これらは、学生が、卒前プログラムに参加し、繰り返し技術を実施することを通して、知識・技術の復習と再確認を行ったり、看護師から現場で実際に行われている技術を学んだりしたことにより、手順や根拠など技術に対する理解が深まり、技術の習得度が向上したことを示す。技術の習得には反復した訓練が必要不可欠であり⁷⁾、卒前プログラムには、学生が看護技術を反復して実施できる環境を整える必要があることを示唆する。

次に、[5. 技術に対する自信獲得]、[9. 技術実施による安心感獲得と不安の軽減]、[12. 臨床現場で行われている技術のイメージ化]、[11. 就職への心構え]、[19. 技術習得度と技術や就職に対する不安との相関関係の解明]に着目した。これらは、卒前プログラムにより、学生が技術に自信を持つことができ、技術や就職に対する不安を軽減し就職への心構えができたという成果が得られたことを示す。卒業を間近にした看護学部4年生を対象に、就職に対する不安を調査した研究⁸⁾は、卒業前の学生が「技術の経験不足」「知識不足」に不安を感じていることを明らかにした。本研究の結果、卒前プログラムにより学生の技術習得度が向上し技術や就職に対する不安が軽減したという成果が得られたことは、卒前プログラムを行うことの意義を示唆する。

次に、[6. 知識不足や未習得技術の自覚と課題の明確化]、[14. 自己評価・他者評価による技術習得状

況の理解]、[17. 学習の必要性実感と学習への動機づけ]、[21. 課題への積極的な取り組み]に着目した。学生は、卒前プログラムに参加することにより、自分に不足している知識や未習得技術を自覚し、学習の必要性を実感し学習へと動機づけられていた。成人の学習は、自己の発達課題や生活問題から発達し、学習への志向は、学習ニーズを充足するための知識や技能の獲得を課題としている⁹⁾。すなわち学生は、卒前プログラムにより自己の課題が明確化できれば、その課題の克服に主体的に取り組む可能性が高い。一方で、卒業前の学生の不安を明らかにした研究¹⁰⁾は、卒業前の学生が「今後の勉強方法」に不安を感じていることを明らかにしている。青年期にある学生は、成人学習者としての特徴を身につける前段階あるいは移行期にある¹¹⁾が、看護基礎教育課程を卒業し看護職者として就職した後は、成人学習者として自律した学習を求められる。卒前プログラムによる課題の明確化に加え、その課題をどのように克服していくのかを、学生とともに考え実現に向け支援する必要性が示唆された。

次に、[13. 演習方法の工夫とその評価]に着目した。卒前プログラムには、臨場感を高めるための多重課題演習やチェックリストの活用、学生間討議などの方法が取り入れられ、その効果を評価し、より効果的なプログラムの提供にむけ検討が行われていた。その一方、[26. トレーニング内容と臨床とのギャップ実感]という卒業生の評価も明らかになっている。これは、卒前プログラムにおいては、より臨床の状況を想定した課題の設定や、臨床で実際に使用している物品を用いたり看護師が実際に行っている方法を説明したりする必要のあることを示す。

次に、[22. スタッフとして働く自分を思い描く]、[23. 看護師として責任を自覚する必要性の理解]、[24. 就職後に直面する問題への対応方法の理解]、[25. 解決困難な課題に対する自身の行動傾向の理解]に着目した。これらは、学生が、看護師の指導を受け就職後の自分をイメージしたり、解決困難な課題に直面したとき自分がどのような状況に陥りやすいのかという傾向を把握したりするという成果を明らかにした。また、学生は、就職後、わからないことがあったとき、どのように行動する必要があるのかを理解していた。就職後3週間の新人看護師行動を概念化した研究¹²⁾は、新人看護師の行動を説明する9概念を創出した。この結果は、新人看護師が、看護師としての責務を自覚するあまり他者への支援要請を躊躇したり、否定的評価

を避けることに関心を集中させ、知識・技術・情報不足のまま看護や業務を遂行することを明らかにした。これは、新人看護師が、わからなかったりできないことがあったりしたときにも、周囲の看護師に支援を要請しにくい状況に置かれていることを示す。プログラムに参加した学生も、就職後は多くの困難に直面することが予測される。しかし、その様な状況に置かれた時の自分の行動傾向や先輩に聞くなどの解決策を理解していることは、直面する困難の解決に役立つ。以上からも、卒前プログラムの意義が示唆される。

次に、[28. 基礎教育と臨床とのギャップを埋める機会]、[3. 就職後の実践に役立つ経験]、[18. 指導する看護師の学習機会]、[27. 教員と指導者が看護技術について共有する機会]に着目した。これらは、卒前プログラムが、参加した学生のみならず、教員にとっても、また指導者として参加する看護師にとっても、学習の機会となることを示している。卒前プログラムは看護基礎教育課程が企画・運営するプログラムだが、臨床からも指導者として看護師の参加を確保する必要性が示唆された。

VI. 結論

本研究は、卒前プログラムの成果に関する文献を対象とし、卒前プログラムによる成果を表す28カテゴリを明らかにした。結果は、知識・技術の再確認と習得度向上による自信の獲得、就職に向けた不安の軽減と意欲の向上、卒業前の学生の学習状況把握、不足知識や未習得技術の明確化と学習の必要性実感、などの成果が得られており、就職にむけ様々な不安を抱えている学生を対象に卒前プログラムを行う意義が示された。より効果的な卒前プログラムの実施に向けては、①学生が技術を反復して実施できるように準備を整える、②習得度が低かったり自信につながりにくかったりする技術があることをふまえ、卒業時の学生の技術習得状況に応じた目的・方法・内容を検討しプログラムを立案する、③臨床の看護師が指導者として参加できるように調整する、の3点が示唆された。今後の課題は、本研究の結果をふまえ、より効果的な卒前プロ

グラムを計画・実施し、その成果を客観的に明らかにすることである。

引用文献

- 1) 日本看護協会出版会編：「新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会」報告書, 日本看護協会出版会, 2005.
- 2) 吉富美佐江, 舟島なをみ：新人看護師を指導するプリセプターの役割遂行上直面する問題, 看護教育学研究, 17(2), 14-15, 2008.
- 3) 渋谷恵子, 石崎邦代, 三上智子：プリセプターの困難と思いの分析からのプリセプター支援検討, 支援体制・時期・研修企画について, 日本看護学会, 看護教育, 39, 157-159, 2009.
- 4) 厚生労働省：新人看護職員研修ガイドライン改定版, 2016.
- 5) 永野光子, 小元まき子, 青柳優子, 他1名：看護基礎教育課程における卒業前教育に関する研究の動向－看護技術教育に焦点をあてて－, 第34回日本看護科学学会学術集会講演集, 376, 2016.
- 6) 永田美和子, 小山英子, 三木園生, 他1名：新人看護師の看護実践上の困難と基礎看護教育の課題, 桐生短期大学紀要, 17, 49-55, 2006.
- 7) 茂野香おる著者代表：系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学(2) 基礎看護技術 I, 15, 医学書院, 2011.
- 8) 大塚眞代, 古米照恵, 藤野文代：看護大学生の進路選択に影響する情報と支援ニーズ－卒業を間近にした看護学部4年次生への調査－, ヒューマンケア研究学会誌, 5(1), 73-77, 2013.
- 9) 舟島なをみ監修：看護学教育における授業展開－質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 医学書院, 56-58, 2013.
- 10) 前掲書8)
- 11) 前掲書9), 20-21.
- 12) 森真由美, 亀岡智美, 定廣和香子, 他1名：新人看護師行動の概念化, 看護教育学研究, 13(1), 52-64, 2004.